

震災後の子どもたち(7)

若者が深呼吸できる場

―ちびくるテント村

村井 雅清



昨年一月十七日六千人を越える死者を出すという未曾有の大地震が兵庫県南部地域を襲いました。報道によると全国各地から百三十万人のボランティアが集まってきたとのこと。『ボランティア元年』と言う文字が何度も私の目に飛び込んできましたが、そもそも『ボランティア』という言葉は私には馴染

まない単語なのです(多分、四十五歳という年齢がそうさせるのだらうと思います)。私たちの『ちびくる救援ぐるうぶ』にも中学生から高校、大学、社会人までたくさんの人たちが救援のために全国から集まってきました。私たちのぐるうぶは特に年齢制限をしていないため、中学生、高

校生が少なくありません。公園にテントを張り、プレハブを建てて、いわゆる“テント村”を活動拠点にしているせいも、居心地がいいようで特に彼等は一度来ると二度目からは二か月、三か月と居着く傾向が目につきます。

“テント村”の生活の中で、高校生の彼等から話を聞いてみるとどこか日常社会からドロップアウトしているように思えるのです。

留年になった夜間高校生、不登校を続けている中学生、休学届を出して進路に悩んでいる大学生など、被災者を含めて十人位が常時“共同生活”をしながら救援活動が続けています。彼等は数名の社会人たちとうまく間合いをとりながら自分の“拠点”を見つけようとしているように見えます。

一年間、彼等と一緒に生活をしてきて私自身も随分悩み、また多くのことも彼等から教えられてきました。それは私の十代、二十代を過ごしてきた時と違うことが多いからだろうと思うのですが高校を卒

業して二十五年余り、一日、十時間から十二時間、ずっと早朝から夜遅くまで働き続けるという生活を震災前まで送ってきたためにそのリズムが日常になつてしまい私の体にしみついていきます。私の震災前までの日常と彼等のここでの日常は全く違う世界のように思えるのです。

“テント村”での決まり事は朝九時にミーティングをするということだけです。それ以外は全く自主性を尊重し運営をしているのですが彼等自身で決めた「九時に集合する」ということを守るのが彼等には大変なようです。

ところで私の日常と彼等のここでの日常が違うと書きましたがそれはひょっとすれば、価値観・人生観の違いではないだろうかとこの一年間で感じるようになり二十五年間に体にしみついた価値観を私自身は正しいとすら思ってきたが彼等の感性から湧き出る表現、行動の素晴らしさに何度も教えられることを感じ二十五年間しみついてきた価値観は間違っ

ているのではないかと悩むときが多い自分に気付きます。

例えば私は救援ぐるうぶの代表をしているものだから朝九時にミーティングのコーディネイト役をするのですが、ともすればいつもまとめようと無意識のうちにしてしまい十七歳の夜間高校生から『別にまとめんでええやん』と忠告をされるのです。あるいは活動の割り振りを毎朝するのですが普段はメニューだけを提示し各々が各々の判断でいきいたい活動を入札!? して活動にはいるのですが夏休みとか春休みとかのシーズンには短期で人の波が来る為、ともすれば機械的に処理しようとしてしまうのです。がそんな時でも、『また仕切ろうとして』という忠告が入るのです。

私にとってはごく当然のシステムだと思ひ込んでいることが彼等にとっては当然ではなく不自然なシステムなのです。震災直後は活動拠点もともすれば冷静さを失い、パニックの日々が続いたのですが夏

を過ぎた頃から少しずつ落ち着きが見え始めて来ました。しかしそれでも非日常の空間がテント村にあるように感じていたのですが実はここでの人と人の関係は非日常ではなく「これが日常なんだ」と気付くのです。テント村の日常性が実は現在の教育現場や職場・家庭の中に存在していなかったのだろうと分かるのです。

当然、彼等は学校や社会からドロップアウトせざるを得ないのですが彼等から見れば、私たちの方がドロップアウトしているに見えるのでしょう。

先日、東京から彼女と一緒に車で来た学生がいて（車は父親の車らしい）彼の車に乗って二時間ほど一緒にドライブをした時のことですが、その彼は車に乗っているが全くといっていい程、車のことについて無知なのです。この寒い季節に東京からずっとクーラーをかけて走って来ており、A/Cというスイッチがクーラーであることを知らなかったのです。思わず笑いこぼしてしまった私ですが私にとつ

ては考えられないことなので彼に「おまえこういうスタイルで生きていて今までに困ったことはないか？」と聞いてみたら迷わず、彼は「別に」と答えるのです。その答えを聞くまでは笑いころげていた私がいざばらく、深刻な顔つきになり考え込んでしまったのです。

彼はこんなスタイルで今まで生きてきて「別に困ったことがない」ということなので、「こんな人生があってもいいのか」と考えさせられるのです。きっと私は二十五年間しみついた価値観を無意識のうちに周りの人たちに押しつけてきたのだろうと気付かされたのです。この一年間テント村という共同生活を救援活動をやりながら続けてきたわけですが私は自分自身と葛藤しながら彼等に教えられ気付かされやっと一年間を終えることができたのです。

今までの身体にしみついてきた価値観を全て変えるにはまだまだ時間が必要となりますがこれからの

一日一日を大切にしなければならぬことを痛感している次第なのです。大震災から一年過ぎましたが私たちは今までの一年間を振り返って年末からミーティングを続けています。「何故、神戸に関わり続けるのか?」「何故救援活動をやっているのか?」

「被災者の自立救援とはどういうことなのか?」ということを真剣に話し合っています。議論の中で夜間高校生であり、とうとう休学してしまった事務局のY子は次のように語るのです。

「このテント村をずっとずっと維持し続けたいのは、ここにいるといっぱい、いっぱい深呼吸ができるから……」と。

(阪神大震災ちびくろ救援ぐるうぶ)

